〈データ紹介〉

イラン・イスラーム共和国と“地方史・誌”の出版状況

八尾師　誠

はじめに

15年の亡命生活の末に帰国したホメイニー師が，1979年２月11日の権力奪取を受けて，同年４月１日にはイスラーム共和国の樹立を高らかに宣言してから既に四半世紀近くが経とうとしている。この時，自らを，第一義的には「イラン人」ではなく，「モサルマーン」（イスラーム教徒）と規定した彼は，この革命を世界の全ての人民を一つの旗，一つの法の下に置く普遍的国家樹立に向けての第一歩であり，一つのモデルであると考えていた(注1)。しかし，その後の経緯が明らかにしているように，革命政権がパフラヴィー体制から受けついだイランの国土は，若干の係争地域はあるものの，基本的には寸土たりとも変わってはおらず，その98%がモサルマーンであるイラン人は依然として，19世紀以来の国境線に囲い込まれた領域内において，イラン国民としての生活を続けている。一方，中央政府の方も，支配の正当性を制度上は人民の意思に求め，画定された領域全体への効果的かつ徹底した支配の維持と，国内の各民族集団に対する自らの権力強化を図り，教育・メディア・国家諸機関を通じて，共通の核となる文化の受容と，優位な社会的・文化的秩序への同化を奨励する方針を堅持している点において，革命以前と革命以後とでは基本的にその性格を変えていない。

つまり，イスラーム革命が社会的価値観の大幅な転換を国民に迫った革命であったとしても，中央政府によるこうした中央集権的政策の踏襲・堅持が物語っているように，イスラーム共和国にあっても，中央集権を機軸とした国民国家としての基本的性格にはパフラヴィー体制時代と根本的に変わるところがないと言えよう。一例を挙げるならば，パフラヴィー体制下における地方行政組織にあっては，知事をはじめとする地方行政官は全て中央から派遣されることを旨としていたが，革命後も，ごく最近になって部分的修正が試みられ始めたものの，基本的には同様の方式を維持している(注2)。とするならば，イランが国民国家としての歩みを始めて以来，顕在化し，絶えずゆるまず続いてきたイラン・ザミーンの「中央」と「地方」への分極化状況，そしてその両者の間の軋轢や緊張関係は，イスラーム共和国下においてもそれまでと同様に存在しているであろうことは容易に看取される。

一方,「中央」•「地方」問題は,多民族国家イランにあっては,ややもすると,民族問題的状況をも帯びることになる点は着目すべきであろう。つまり,イラン国内のいわゆる少数民族集団は，都市部での一定程度の混住状況とは裏腹に，その主要な居住圏・生活圏は，顕著な地域的偏差を示しているからである。例えば，トルコ人は東西アゼルバイジャン州およびアルダビール州，トルキャマン人はゴレスターン州，クルド人はコルデスターン州およびケルマーンシャーハーン州，アラブ人はフーゼスターン州，バルーチ人はスィースターン・バルーチェスターン州といった具合にである。

このような複雑に入り組んだ背景を有し，しかも多様な側面を呈している現在の国民国家イラン・イスラーム共和国における「中央」•「地方」問題が，実際に，どのような形で存在し，それがどのように表象されているか，また，イスラーム共和国政府やイラン国民は，この「中央」•「地方」問題をどのような問題と考えているのかというテーマの分析を進めるための重要な手懸かりとして，そしてまた一次資料として，筆者は，かねがね，“地方史•誌”の存在に着目してきた。そこで，小稿では，一次資料としての“地方史・誌”の概要を提示し，それに関する基本データを紹介しつつ，特徴的ないくつかの点を指摘した上で，若干のコメントを付すことにしたい。

“地方史・誌”とは何か

さて，筆者は10年ほど前から，以上のような基本的問題関心に沿って，その具体的な分析の対象としての“地方史・誌”に着目し，収集と整理を続けてきた。これまでに，その一応の成果として，1997年には東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所から『イラン「地方史・誌」刊本総覧』（ペルシア語）を，また，予備的分析としては，同じく1997年に，アジア経済研究所の研究双書の一冊である『中東における中央権力と地域性』に，「国民国家イランにおける『地方史•誌』の出版と中央・地方関係」と題する報告を上梓する機会を得た。

その際に既に，筆者が意図する“地方史・誌”に関しての概略は述べてあるが，ここで，再度，確認しておくこととする。

端的に言えば，ここで意味する「地方史」,「地方誌」とは，現在の国民国家イランが領有している地理的領域内の，ある特定の部分（＝地域）の歴史や地誌を主たる記述内容としている文献としておきたい。つまり，特定の地域の地域性の記述を目的として著された文献一般を広く，この範疇に加えておきたい。例えば，革命後のイランで，一際目を引く遊牧諸集団関係の文献なども，前述のように，これら諸集団の生活圏，居住圏が地域的偏差を大きな特徴としていることを考え，ここでいう“地方史・誌”に含めることとする。

ところで,「地方」という用語自体，大別して二つの意味合いを想起させる。一つは,「中央」に対する「地方」であり，中国でいう「地方志」という場合の「地方」はこの意味合いであろう。因みに，特定の地域の地理的現象，風俗，習慣，民俗誌などを記録した地誌を意識的かつ系統的に発展させてきた中国では,「地方志」とは，中国全体の地理書である「総志」に対する名称である。

もう一つの意味は，全体（具体的には国民国

家）の中の一部（＝地域）でありながら，その範囲内において，ある共通性・一様性を有し，その特有の個性（＝地域性）によって，他地域とは区別される特定の領域というほどの意味である。ペルシア語でいうところの mahall, nāhīye, diyār, mantaqe などはいずれもこうした意味合いと考えられる。小稿でいう“地方史・誌”の「地方」とは，基本的には後者の意味であるが，文脈によっては前者の意味合いを帯びることもあると考えている。

さて，“地方史•誌”を以上のような意味合いで定義づけた場合，実は，この用語に過不足なく対応するペルシア語の語彙が必ずしも存在しているわけではないことに気づく。ペルシア語出版物の場合，歴史を主な内容としていれば，「～の歴史」（Tārīkh-e ～）と銘打っているし，地誌的情報に重きを置いていれば，「～の地理」（Joghrafiyāye ～）と題するのが一般的である。「～の歴史地理」（Tārīkh-e Joghrafiyā'īye ～ or Joghrāfiyā-ye Tārīkhī-ye ～）あるいは「～の歴史と地理」（Tārīkh va Joghrafiyā-ye ～）というタイトルを冠している場合もままある。これらは全てここで言う“地方史・誌”に含まれることはいうまでもない。更に，特定地域の名士列伝，民俗誌，社会言語学的方言調査から経済発展の現状分析に至るまで，加えて，革命後に目立つようになってきている特定の民族集団に関するモノグラフなど，多様な内容のものをここでは全て“地方史・誌”という括りで考えることとする。

筆者は1997年に『イラン「地方史・誌」刊本総覧』を発表した後も折を見ては個々の“地方史•誌”アイテムおよび関連情報の収集を続けてきたが，小稿で紹介するのは，そのとりあえずの報告である。つまり，今回，小稿が検討の対象とするのは，イラン太陽暦1379年度（西暦2000／01年）までに出版された分であり，実際に収集し得た2325点である。『イラン「地方史•誌」刊本総覧』初版の収録総点数が1524点であったから，800点ほどが新たに付け加えられた計算になる。その内訳は，初版が対象としていたイラン太陽暦1374年度（西暦1995／96年）までの分の未収録アイテムが約370点，1375年から1379年までに新たに出版されたものが約430点である[注3]。

年度別出版点数に関する若干の検討

収集されたデータの整理に際しては，当該アイテムが対象とする「地域」ごとに分類した上で，書名（副題を含む），著者名，編者名，翻訳者名などの人名，出版地，出版年，版数，巻数，印刷部数，形態（頁数，版規格），値段，主な内容など，可能な限りの書誌データを盛り込むよう配慮した。

こうして，収集・整理されたデータを材料にして，様々な観点からの分析が可能となるが，ここでは，特に年度別出版点数に着目し，イランにおける“地方史・誌”の出版状況の歴史的変遷を踏まえつつ，特にイスラーム革命以前と以後との対比に焦点を絞り，そのおおまかな傾向と特徴を指摘しておきたい。

第１表は筆者が収録した“地方史・誌”――出版年が示されていない（あるいは関連目録類でも確認できない）135点を除いた残りの点数は2190点――を出版年度別にまとめたものである[注4]。

このデータを検討する前に，イラン近現代

第１表　年度別“地方史・誌”出版点数

Q…Qamarī -ye Hejrī（ヘジュラ太陰暦）
Sh…Shāhanshāhī　（皇帝暦）
M…Mīlādī　（西暦）

イラン太陽暦	西暦	出版点数	備考	イラン太陽暦	西暦	出版点数	備考
	1858／59	1	1275Q	1337	1958／59	7	
	1881／82	1	1299Q	1338	1959／60	13	
	1885／86	1	1303Q	1339	1960／61	11	
	1897／98	1	1315Q	1340	1961／62	12＋１［Q］	
	1898／99	1	1316Q	1341	1962／63	15	
	1899／1900	1	1317Q	1342	1963／64	23	
	1908／09	1	1326Q	1343	1964／65	21	
	1909／10	1	1327Q	1344	1965／66	32	
	1911／12	1	1329Q	1345	1966／67	38	
	1913／14	1	1332Q	1346	1967／68	35	
	1914／15	2	1333Q	1347	1968／69	45	
	1917／18	1	1336Q	1348	1969／70	45＋１［M］	
	1920／21	1	1339Q	1349	1970／71	47	
1304	1924／25	2＋２［Q］		1350	1971／72	52＋１［Q］	
1306	1927／28	1		1351	1972／73	32	
1307	1928／29	1		1352	1973／74	51	
1308	1929／30	1		1353	1974／75	37	
1310	1931／32	4		1354	1975／76	31	
1311	1932／33	1		1355	1976／77	23＋１[M]+1[Q]+38[Sh]	
1312	1933／34	6		1356	1977／78	20＋１[M]　＋29[Sh]	
1313	1934／35	9＋１［Q］		1357	1978／79	31＋９[Sh]	
1314	1935／36	5		1358	1979／80	48	
1315	1936／37	2		1359	1980／81	24	
1316	1937／38	6		1360	1981／82	20	
1317	1938／39	8		1361	1982／83	24	
1318	1939／40	1		1362	1983／84	29	
1319	1940／41	4		1363	1984／85	49	
1320	1941／42	11		1364	1985／86	44	
1321	1942／43	4＋１［Q］		1365	1986／87	21	
1322	1943／44	2		1366	1987／88	35	
1323	1944／45	5		1367	1988／89	33	
1324	1945／46	6		1368	1989／90	44	
1325	1946／47	9		1369	1990／91	66	
1326	1947／48	10＋１［M］		1370	1991／92	88＋１［M］	
1327	1948／49	11		1371	1992／93	75＋１［M］	
1328	1949／50	11		1372	1993／94	68	
1329	1950／51	7		1373	1994／95	80	
1330	1951／52	12		1374	1995／96	69	
1331	1952／53	7		1375	1996／97	90	
1332	1953／54	13		1376	1997／98	70	
1333	1954／55	22＋１［Q］		1377	1998／99	74	
1334	1955／56	16＋１［M］		1378	1999／2000	86	
1335	1956／57	14		1379	2000／01	106	
1336	1957／58	10		総点数		2,190点	

（出所）　筆者調査により作成。

史の大まかな展開との関わりで，イランにおける“地方史・誌”出版の背景を整理しておこう。

イランにおける刊本の歴史(当初は石版刷りが隆盛を極めた)が始まる19世紀中葉から1920年頃までは,“地方史・誌”出版の動向に目立った動きはほとんど見られない。しかし，レザー・シャー政権が登場し，体制を支える理論的支柱としてのイラン・ナショナリズムが喧伝され,「イラン」概念への拘りが徐々に醸成されてくると,「イラン」を構成する各部分(＝地方）への関心も同時に惹起されるようになり,「イラン的なるもの」の発掘，顕彰を主たる目的とした政府関連の研究機関も創設されるようになる。1922年秋に設置された「国民の遺産協会」(Anjoman-e Āthār-e Mellī）などは最も代表的な機関の一つであった(注5)。

とはいえ，“地方史・誌”類の出版状況に少なからずの変化が見られ始めるのは，1950年前後の時期からである。まず，イスラーム期以前の時期を専門とする著名な文献学者，エフサーン・ヤールシャーテル博士のイニシアティヴによって「文献翻訳・出版協会」(Bonyād-e Tarjome va Nashr-e Ketāb）が創設され（1953年),「イラン学シリーズ」(Majmūʻe-ye Īrānshenāsī）・「ペルシア語原典シリーズ」(Majmūʻe-ye Motūn-e Fārsī）が立ち上げられた。これが“地方史・誌”類の出版の大きな推進力となった。また，1964年にはファラ王妃の財団の支援を受けて創設された「イラン文化協会」(Bonyād-e Farhang-e Īrān)も“地方史・誌”類の出版には深い関心を寄せ，特に，その目玉ともいうべき出版シリーズ「イランの歴史・地理史料」(Manābeʻ-e Tārīkh va Joghrāfiyā-ye Īrān）は，“地方史・誌”類の出版には多大な貢献をすることとなる(注6)。折りしも,1960年代というのは，第２表が示しているように，イラン国内における出版総点数が，第二次世界大戦期頃までに較べて急激に増加し，出版界全体が活況を呈しはじめていた時期にあたっていた。更に，オイル・ブームが到来する1970年代初頭からは出版界の活況に拍車がかかってゆく。

第２表　革命前の単行本出版状況

年度		出版点数
イラン太陽暦	西暦	
1320	1941／42	328
↓		
1340	1961／62	587
1341	1962／63	803
↓		
1343	1964／65	1,048
1349	1970／71	4,359
1350	1971／72	3,474
↓		
1352	1973／74	3,070
1353	1974／75	2,899
1354	1975／76(est)	3,100
1355	1976／77(est)	3,200

（出所） *Iran Almanac and Book of Facts-1977-*, Echo of Iran, 1977, p.140.

“地方史・誌”の出版点数も基本的にはこうした趨勢に呼応するかのように，1940年代の終わり頃から恒常的に二桁を示すようになり，1960年代の初め頃からはその点数が右肩上がりで上昇し始める。そして革命直前の1355年（1976／77年）には出版点数のピークに達するのである。

ところが，1979年２月の権力奪取劇は，政治・経済・社会の各分野において多大な混乱と困難を伴う事態を招来することとなった。出版界においても例外ではなく，総出版点数も1357年を境に急激に落ち込み，翌年には前年比で半減，更にその翌年，その翌々年と立

第３表　革命前後における単行本出版状況

年度		総出版点数	前年比
イラン太陽暦	西暦		
1357	1978／79	4,504	－
1358	1979／80	1,923	−2,581
1359	1980／81	1,483	−440
1360	1981／82	1,383	−100
1361	1982／83	3,051	+1,668
1362	1983／84	4,796	+1,745
↓			
1364	1985／86	5,448	
1365	1986／87	3,810	
1366	1987／88	4,873	
↓			
1375	1996／97	12,897	
1376	1997／98	14,017	
1377	1998／99	15,960	
1378	1999／2000	20,642	
1379	2000／01	23,305	

（出所）‘Alī Samī‘ī, *Godharī dar Bāzār-e Nashr-e Īrān, Ketābnamā-ye rān* (1366), *Year Book-Iran 89/90* (1989), *kārnāme-ye Nashr-Fehrest-e Ketābhāye Montasher shode dar Sāl-e 1375, Kārnāme-ye Nashr- Fehrest-e Ketābhāye Montasher shode dar Sāl-e 1376, Karname-ye Montasher shode dar Sāl-e 1377, Karnāme-ye Montasher shode dar Sāl-e 1378, Karnāme-ye Montasher shode dar Sāl-e 1379* より作成。

て続けに減少傾向を示している（第３表）。

こうした状況を反映してか，“地方史・誌”の出版点数も，ピークの1355年，それに続く1356年，1357年に比して，権力奪取後の1359年，1360年，1361年などはほぼ半減に近い状態にまで落ち込んだ。ただ，1358年のみは49点と，一見，異常な点数を示している。その理由は，この数値の中に，この時期にはまだ比較的自由な活動が許されていた各政治セクトが，プロパガンダの一環として発行したコルデスターン問題，トルキャマン・サフラー問題，バルーチェスターン問題などに関するパンフレット類も“地方史・誌”の一種としてカウントされているためである。

その後，新政権が徐々に権力基盤を固め，また，８年間に及んだイラクとの戦争にも一応の終止符が打たれ，同時に，権力奪取後から，出版界の悩みの種であった紙不足状況なども徐々に解消されるに及んで，出版界に再生の兆しが見え始めると，“地方史・誌”の出版も息を吹き返し，1379年には100点をこえる関連文献が世に問われになるまで成長した。

ここで，もう一度“地方史・誌”の出版状況を大まかな時期区分に従って整理し直してみることにしよう。第一期は，出版年がヘジュラ太陰暦で示されている1920年頃まで。この時期の“地方史・誌”の出版点数が微々たるものであることは，さして驚くには当たらないであろう。第二期は1304年（1924／25年）からイスラーム革命勃発までである[注7]。つまり，パフラヴィー時代のほぼ55年間がこれに相当する。この時期に出版された“地方史・誌”として，今回までに収集することが出来たのは全部で931点である。

これに対して，イスラーム革命以後，1379年(2000／01年)までの22年間の出版にかかる“地方史・誌”の収集総点数は1,245点に上っている。とりわけ,1990年代以降は,イラン国内の政治的・社会的状況が相対的に安定に向かったこともあって，書籍の総出版点数が相当程度の伸びを示していることはいうまでもないが,それにしても,パフラヴィー時代のほぼ半分の期間で，パフラヴィー時代全期間における“地方史・誌”の出版総点数に相当する，あるいはそれを上回る点数を示していることは，イスラーム共和国下における際だった特徴として指摘できるであろう。単なる書誌情報に依拠した外在的分析ではなく，内容に即

した内在的分析を待たねばならないことは言うまでもないが，それでもこうした“地方史・誌”出版の盛況からは，イラン・イスラーム共和国政府も，その国民も，イランという国民国家の空間的広がりの多様性に深い関心を注いでいることを十分に看取しうるであろう。

実際，1997年５月には，広義のイラン文化・文明に関する様々な表象を巡るあらゆる議論や問題を研究対象とするイラン学(Īrānshenāsī)の推進を基本的かつ中心的活動・研究領域とするイラン学研究事業団(Bonyād-e Īrānshenāsī)が創設され，1998年から99年にかけては全国28州の内の13の州に支部が組織された。そして，そのトップには大統領主席補佐を務めるハサン・ハビービー博士が据えられたことは，こうした事業が正に国家的事業として位置づけられていることを示していた(注８)。また，イラン学研究事業団とは一線を画する形で，マシュハドにはホラサーン・シェナースィー(ホラーサーン学センター)，ケルマーンにはケルマーン・シェナースィー，シーラーズにはファールス・シェナースィー，ハメダーンにはハメダーン・シェナースィーなどが続々と設立され活発な出版・文化活動を展開しているし，民間では，ラシュトのギーラカーン出版社，ホッラム・アーバードのファラコル・アフラール出版社のように，当該地方（地域）関係の出版を専らにする出版社も数多く出現している。

“地方史・誌”が対象とする地域に関する若干の検討

さて，第４表は，今回収集し得た“地方史・誌”の全アイテムを，それらが対象とする地域別に区分・整理したものである。全体として，地域分けそのものの傾向や対象とされている地域の偏りなど，いくつか特徴的な事柄を指摘できると思うが，ここでは特に，革命後に出版されたこれら“地方史・誌”が対象としている地域に関して，二，三の目立った傾向を指摘するにとどめたい。

「地方」の問題が民族地域の問題と重なり合う傾向があることは既に指摘してあるが，権力奪取からその直後にかけては，これら特定の民族地域にかんする出版が急激に増加していることがまず指摘できるであろう。

例えば，権力奪取前後に激しい自治要求闘争が展開されたクルド人地域(注９)についてみると，革命以前には全部で47点しか関連文献が出版されていなかったにも拘わらず，1979年の権力奪取から2000年までの期間に実に115点が出版されている。同様の傾向はトルキャマン・サフラー地域(注10)にも当てはまるようである。この地域も，パフラヴィー時代にシャーが体制の受益者などに下賜した豊かな農業用地の再配分を巡って革命の最中に暴動が発生し，これと並行してトルキャマン人による自治要求運動が勃発するなど，中央（政府）にとってはゆゆしき問題地域であった。この地域に関する“地方史・誌”は，総点数では42点と決して多くはないが，革命前には11点を数えるのみであったものが，革命後の僅か20年間ほどで28点に達しているのである。そして，クルド人地域，そしてトルキャマン・サフラー地域に関する“地方史・誌”に共通してみられる傾向として指摘できることは，地理的領域を記述の基本的枠組みとして設定するというよりは，いわゆる民族集団として

第４表　“地方史・誌”対象地域別一覧

対象地域 ［ペルシア語のアルファベット順］		点数
アーバーダーン	Ābādān	4
アーバーデ	Ābāde	3
アゼルバイジャン（東•西両アゼルバイジャン州および アルダビール州を含む）	Ādharbāyjān	196
アゼルバイジャン＆ザンジャーン	Ādharbāyjān & Zanjān	1
アゼルバイジャン＆コルデスターン	Ādharbāyjān & Kordestān	2
アゼルバイジャン＆マーザンダラーン	Ādharbāyjān & Māzandarān	1
アーザルシャフル	Ādharshahr	1
アーラーン＆ビードゴル	Ārān va Bīdgol	1
アーシュティヤーン	Āshtiyān	1
アーシュルアデ（アーバスクーン）	Āshurade (Ābaskūn)	1
アーモル	Āmol	3
アバルクーフ（アバルグゥ）	Abarkūh(Abarqū)	2
アブハル	Abhar	1
アブゥ・ゼイダーバード	Abū Zeydābād	1
アービヤーネ	Ābiyāne	2
アラーク	Arāk	7
アラジャーン＆ベフベハーン	Arajān va Behbehān	1
アルダビール	Ardabīl	13
アルデスターン	Ardestān	2
アルダカーン	Ardakān	1
アルダラーン	Ardalān	2
アラスバーラーン（アハル）	Arasbārān(Ahar)	4
アルサンジャーン	Arsanjān	2
オルーミーエ	Orūmiyye	7
オルーナグ＆アンザーブ	Orūnaq va Anzāb	1
中央州	Ostān-e Markazī	2
エスタル・アーバード（ゴルガーン）	Estar Ābād	4
オストゥーナーヴァンド	Ostūnāvand	1
アサド・アーバード	Asad Ābād	2
エスファラーイェン	Esfarāyen	5
オシュクール	Oshkūr	2
エスファハーン	Esfahān	91
エスファハーン＆チャハール・マハール＆バフティヤーリー	Esfahān & Chahār Mahāl & Bakhtiyārī	1
エスファハーン＆レイ	Esfahān & Rey	1
ダシュテ・キャヴィール周辺地域	Atrāf-e Dasht-e Kavīr	1
アフタル	Aftar	1
アラシト	Alasht	4
アルボルズ	Alborz	3
アラシタル	Alashtar	2
アラムート	Alamūt	2
エマーメ	Emāme	1
アナーラク	Anārak	1
アンジールダーン	Anjīrdān	1
アンディーメシク	Andīmeshk	1
オウラーザーン	Owrāzān	1

エヴァズ	Evaz	1
アフヴァーズ	Ahvāz	1
イーラーンシャフル	Īrānshahr	1
イーザド・ハースト	Īzad Khāst	1
イーラーム	Īlām	11
イーラーム&ロレスターン	Īlām & Lorestān	1
イールフチー	Īlkhchī	1
エイヴァーン	Eyvān	1
バーボル	Bābol	6
バーフタラーン（ケルマーンシャー）	Bākhtarān	1
バーネ	Bāne	2
バーフーキャラート	Bāhūkalāt	1
バジェスターン	Bajestān	1
ボジヌールド	Bojnūrd	6
ボラーズジャーン	Borāzjān	1
バルドスィール	Bardsīr	2
ボルージェルド	Borūjerd	7
バスタク	Bastak	4
バスターム	Bastām	2
バシャーゲルド	Bashāgerd	1
バルーチェスターン	Balūchestān	28
ボルーク・ザフラー	Bolūk Zahrā	2
バム	Bam	7
バムプール	Bampūr	1
ベント	Bent	1
バンダレ・アンザリー	Bandar-e Anzalī	6
バンダレ・アッバース	Bandar-e ‘Abbās	3
バンダレ・ギャズ	Bandar-e Gaz	1
バンダレ・レンゲ	Bandar-e Lenge	1
ブーシェフル	Būshehr	6
ブーカーン	Būkān	1
ベフベハーン	Behbehān	2
ベフシャフル	Behshahr	2
ビードゴル	Bīdgol	1
ビールジャンド	Bīrjand	7
ビーソトゥーン	Bīsotūn	1
ベイザー	Beyzā	1
ベイハグ	Beyhaq	1
パージュ	Pāzh	1
パーサールガード	Pāsārgād	3
パーヴェ	Pāve	1
ポシュトクーフ	Poshtkūh	2
ピーレ・バーザール	Pīr-e Bāzār	1
ピーシェヴァー	Pīshevā	1
ターレシュ	Tālesh	5
タブリーズ	Tabrīz	60
タブリーズ&ラシュト	Tabrīz & Rasht	1
タブリーズ&ゴム	Tabrīz & Qom	1
タフテ・ジャムシード	Tahkt-e Jamshīd	17
タフテ・ジャムシード&ナグシェ・ロスタム&パーサールガード	Tahkt-e Jamshīd & Naqsh-e Rostam & Pāsārgād	1

タフテ・ソレーマーン	Takht-e Soleymān	5
トルバテ・ジャーム	Torbat-e Jām	5
トルバテ・ヘイダリーエ	Torbat-e Heydariyye	4
トルキャマンチャーイ	Torkamanchāy	1
トルキャマン・サフラー	Torkaman Sahrā	18
トルキャマン・サフラー&ダシュテ・モガーン&他	Torkamansahrā & Dasht-e Moghān	1
タフレシュ	Tafresh	1
タフレシュ&アーシュティヤーン	Tafresh & Āshtiyān	1
タカーブ	Takāb	1
トノカーボン	Tonokābon	3
タンゲスターン	Tangestān	7
タンゲスターン&ダシュティー&ダシュテスターン	Tangestān & Dashtī & Dashtestān	2
トゥース	Tūs	2
トゥーイセルカーン	Tūyserkān	3
テヘラン	Tehrān	61
ジャージャルム	Jājarm	1
大小トンブゥ&アブゥ・ムーサー島	Jazāyer-e Tonb-e Bozorg o kūchek va Abū Mūsā	3
ハールグ島	Jazīre-ye Khārk	9
ゲシム島	Jazīre-ye Qeshm	3
キーシュ島	Jazīre-ye Kīsh	2
ホルモズ島	Jazmre-ye Hormoz	1
ヘンドラービー島	Jazīre-ye Hendrābī	1
ジャンダグ	Jandaq	3
ジャンダグ&トルード	Jandaq va Torūd	1
ジョンディー・シャープール	Jondīshāpūr	2
南部イラン	Jonūb-e Īrān	11
ジャヴァーンルード	Javānrūd	1
ジョウシェガーネ・ガーリー	Jowsheqān -e Qālī	1
ジャフロム	Jahrom	6
ジロフト&キャフヌージュ	Jīroft & Kahnūj	2
チャーバハール	Chābahār	1
チャールース	Chālūs	1
チョガーザンビール	Choghāzanbīl	4
チャハール・マハール&バフティヤーリー	Chahārmahāl & Bakhtiyārī	36
東部イラン	Khāvar-e Īrān	1
ホラーサーン	Khorāsān	88
ホラーサーン&スィースターン	Khorāsān & Sīstān	1
ホラーサーン&マーザンダラーン	Khorāsān & Māzandarān	1
ホッラマーバード	Khorramābād	5
ホッラムシャフル	Khorramshahr	7
ハルハール	Khalkhāl	6
ペルシア湾	Khalīj-e Fārs	104
ホメイン	Khomeyn	1
ホンジュ	Khonj	1
ハーフ	Khāf	1
ハーフ&アービヤーネ	Khāf & Ābiyāne	1
ハーンサール	Khānsār	7
ハーンサール&アラーク	Khānsār & Arāk	1
ハーンサール&シーラーズ	Khānsār & Shīrāz	1
フール	Khūr	3

フーゼスターン	Khūzestān	55
フーゼスターン＆コフギールーイェ＆ママサニー	Khūzestān & Kohgīlūye & Mamasanī	1
ホイ	Khoy	5
ヘイラーバード	Kheyrābād	1
ダーラーブ	Dārāb	2
ダームガーン	Dāmghān	6
ダルギャズ	Dargaz	5
ダルギャズィーン＆カーシャーン	Dargazīn & Kāshān	1
ダッレシャフル	Darreshahr	2
デズフール	Dezfūl	4
ダシュテ・ルート	Dasht-e Lūt	7
ダシュテ・モガーン	Dasht-e Moghān	3
ダシュテ・ミーシャーン	Dasht-e Mīshān	1
ダシュテスターン	Dashtestān	4
デリージャーン	Delījān	2
ダマーヴァンド	Damāvand	2
ダッヴァーン	Davvān	2
デフロラーン	Dehlorān	1
デイラマーン	Deylamān	1
ラームサル	Rāmsar	3
ラームホルモズ	Rāmhormoz	1
ラーミヤーン＆フェンデレスク	Rāmiyān & Fenderesk	1
ラーヴァル	Rāvar	3
ラシュト	Rasht	5
ラフサンジャーン	Rafsanjān	1
ルードバール	Rūdbār	1
ルードバール＆アラムート＆ガズヴィーン	Rūdbār & Alamūt & Qazvīn	1
ルードサル	Rūdsar	1
ルーヤーン	Rūyān	1
レイ	Rey	11
ザーグロス	Zāgros	1
ザーヴェ	Zāve	1
ザルガーン	Zarqān	1
ザランド	Zarand	1
ザランド＆クーフボナーン	Zarand & Kūhbonān	1
ゼフレ	Zefre	1
ザンジャーン	Zanjān	7
ザヴァーレ	Zavāre	1
ズールアーバーデ・ジャーム	Zūrābād-e Jām	1
サーリー	Sārī	3
サーヴェ	Sāve	1
サブゼヴァール	Sabzevār	5
サブゼヴァール＆エスファラーイェン	Sabzevār & Esfarāyen	1
サバラーン	Sabalān	2
サラフス	Sarakhs	2
サルドルード	Sardrūd	1
サルヴェスターン	Sarvestān	2
サッゲズ	Saqqez	3
ソルターニーエ	Soltāniyye	4
サルマース［シャープール］	Salmās	2

セムナーン	Semnān	11
サングサル	Sangsar	1
サナンダジュ	Sanandaj	2
サヴァードクーフ	Savādkūh	1
ソルドゥズ（ナガデ）	Solduz	1
セヘザール	Sehezār	1
サハンド	Sahand	1
スィヤーフキャル	Siyāhkal	1
スィーラーフ	Sīrāf	2
スィールジャーン	Sīrjān	2
スィースターン	Sīstān	18
スィースターン＆バルーチェスターン	Sīstān & Balūchestān	11
シャールード	Shārūd	2
シャーヒー（ガーエム・シャフル）	Shāhī	1
シャベスタル	Shabestar	3
シャルフーイェ	Shārfūye	1
北部イラン	Shomāl-e Īrān	6
シェミーラーン	Shemīrān	3
シューシュ	Shūsh	5
シューシタル	Shūshtar	9
シャフレザー（ゴムシェ）	Shahrezā	3
シャフサヴァール（トノカーボン）	Shahsavār	1
シーラーズ	Shīrāz	41
シールヴァーン	Shīrvān	1
スーメエサラー	Sūme‘e Sarā	2
ターレシュ	Tālesh	7
ターレガーン	Tāleqān	7
タバレスターン	Tabarestān	3
タバレスターン＆ルーヤーン＆マザンダラーン	Tabarestān & Rūyān & Māzandarān	2
タバス	Tabas	4
エラーゲ・アジャム	‘Erāq-e ‘Ajam	1
アリーアーバーデ・キャトゥール	‘Alī ābād-e Katūl	2
アンバラーン	‘Anbarān	1
ガーレ・アリーサドル	Ghār-e ‘Alī Sadr	1
西部イラン	Gharb-e Īrān	3
ファールス	Fārs	58
マフムーダーバーデ・ファールス	Mahmūdābād-e Fārs	1
ファール	Fāl	1
フェデシクーイェ	Fedeshkūye	1
ファラーマルザーン	Farāmarzān	1
フェルドゥース	Ferdūs	2
フォルーマド	Forūmad	1
ファサー	Fasā	1
ファシャーン	Fashān	1
ファシェンダク	Fashandak	1
フィールズ・アーバード	Fīrūz Ābād	1
ガーセム・アーバード	Qāsem Ābād	1
ガーエン	Qā‘en	3
ガーエナート＆ゴヘスターン	Qā‘enāt &Qohestān	2
ゴルヴェ＆ビージャール＆ディーヴァーン・ダッレ	Qorve & Bījār & Dīvān Darre	1

ガズヴィーン	Qazvīn	9
ガスラーン	Qasrān	1
ガスレ・シーリーン	Qasr-e Shīrīn	1
ゴム	Qom	33
グーチャーン	Qūchān	8
グーメス	Qūmes	1
ゴヘスターン	Qohestān	1
ギーロッカールズィーン	Qīr o Kārzīn	1
カーゼルーン	Kāzerūn	7
カーゼルーン＆シーラーズ	Kāzerūn & Shīrāz	2
カーシャーン	Kāshān	21
カーシャーン＆マハッラート	Kāshān & Mahallāt	1
カーシャーン＆ナタンズ	Kāshān & Natanz	1
カーシュマル	Kāshmar	4
コジュール	Kojūr	1
キャラジュ	Karaj	1
コルデスターン	Kordestān	106
ケルマーン	Kermān	63
ケルマーン＆バルーチェスターン	Kermān & Balūchestān	2
ケルマーンシャー	Kermānshāh	17
ケルマーンシャー＆コルデスターン	Kermānshāh & Kordestān	1
ケルマーンシャーハーン	Kermānshāhān	18
ケリーンガーン	Kerīngān	2
キャラート	Kalāt	1
キャラート＆サラフス	Kalāt & Sarakhs	1
キャラーテ・ヒージュ	Kalāt-e Khīj	1
ケラールダシュト	kelārdasht	3
キャマレ	Kamare	1
キャンドルース	Kandlūs	1
キャンガーヴァル	Kangāver	2
クーフバナーン	Kūhbanān	1
クーフマレ・ノウダーン＆ジャルーグ＆ソルヒー	Kūhmare Nowdān & Jarūq & Sorkhī	1
キャヴィーレ・ナマク	Kavīr-e Namak	4
コフギールーイェ	Kohgīlūye	1
コフギールーイェ＆ボイェル・アフマド	Kohgīlūye & Boyer Ahmad	13
ガーヴコシャク	Gāvkoshak	1
ギャラカーン	Garakān	1
ゴルガーン	Gorgān	17
ゴルガーン＆エスタルアーバード	Gorgān & Estar Ābād	1
ギャルムサール	Garmsār	2
ゴルパーイェガーン	Gorpāyegān	1
ゴレスターン	Golestān	1
ゴナーバード	Gonābād	7
ギャンドマーン	Gandomān	1
ギーロデイラム	Gīlo Deylam	5
ギーラーン	Gīlān	143
ギーラーン＆アゼルバイジャン	Gīlān & Ādharbāyjān	1
ギーラーン＆デイラメスターン	Gīlān & Deylamestān	2
ギーラーン＆ガズヴィーン	Gīlān & Qazvīn	1
ギーラーン＆マーザンダラーン	Gīlān & Māzandarān	19

ギーラーン＆マーザンダラーン＆アゼルバイジャン	Gīlān & Māzandarān & Ādharbāyjān	1
ギーラーン＆マシュハド	Gīlān & Mashhad	2
ラール	Lār	2
ラーレスターン	Lārestān	12
ラーヒージャーン	Lāhījān	3
ロレスターン	Lorestān	56
ロレスターン＆フーゼスターン	Lorestān & Khūzestān	1
ラシュト・ネシャー	Lasht Neshā	1
ランガー	Langā	1
ランゲルード	Langerūd	2
マールリーク	Mārlīk	4
マーザンダラーン	Māzandarān	52
マーザンダラーン＆エスタルアーバード	Māzandarān & Estar Ābād	1
マーザンダラーン＆ゴレスターン＆トルキャマン・サフラー	Māzandarān & Golestān & Torkaman Sahrā	1
マースーレ	Māsūle	5
マークー	Mākū	2
マフムード・アーバード	Mahmūd Ābād	1
マラーゲ	Marāghe	7
マランド	Marand	5
マルヴダシュト	Marvdasht	1
マスジェデ・ソレイマーン	Masjed-e Soleymān	1
メシュキーン・シャフル	Meshkīn Shahr	2
マシュハド	Mashhad	46
マシュハデ・アルデハール	Mashhad -e Ardehāl	2
モガーン	Moghān	1
マクラーン	Makrān	1
マラーイェル	Malāyer	2
ママサニー	Mamasanī	10
マハーバード	Mahābād	4
ミヤーンドアーブ＆タカーブ＆シャーハーン・デジュ	Miyāndoāb & Takāb & Shāhīn Dezh	1
ミヤーネ	Miyāne	3
メイボド	Meybod	2
メイマク	Meymak	1
ナーイバンド	Nāyband	1
ナーイーン	Nā'īn	4
ナジャフ・アーバード	Najaf Ābād	1
ナラーグ	Narāq	1
ナタンズ	Natanz	1
ナフトシ・ャフル	Naf Shahr	1
ナガデ	Naqade	1
ナミーン	Namīn	1
ヌール	Nūr	1
ヌーシ・アーバード	Nūsh Ābād	1
ナハーヴァンド	Nahāvand	1
ネイリーズ	Neyrīz	1
ネイシャーブール	Neyshābūr	12
ヴァール	Vār	1
ヴァラーミーン	Varāmīn	4
ヴァフス＆アーシュティヤーン＆タフレシュ	Vahs & Āshtiyān & Tafresh	1
ハルスィーン	Harsīn	1

ホルモズガーン	Hormozgān	3
ハザーヴェ	Hazāve	1
ハシュトルード	Hashtrūd	2
ハフト・タッペ	Haft Tappe	1
ハメダーン	Hamedān	21
ハメダーン＆アラーク	Hamedān & Arāk	1
ハメダーン＆ガズヴィーン＆ゴム	Hamedān & Qazvīn & Qom	1
ホヴェイゼ	Hoveyze	2
ヤズド	Yazd	27
ヤズド＆ケルマーン	Yazd & Kermān	2
ユーシュ	Yūsh	2

（出所） 筆者調査により作成。

のクルド人やトルキャマン人自体に関心の対象を集中させていることであろう。

最後に，革命以前と以後を比較した場合，クルド人地域やトルキャマン・サフラー地域関係の“地方史•誌”出版とは異なる傾向を示している事例として,「ペルシア湾」（Khalīj-e Fārs）―― Daryā-ye Pārs という表現もあり――地域について若干ふれておくことにしよう。この地理的概念は，言うまでもなく，アラブ諸国との間に横たわる「湾」を意図しているわけだが，実際上は，これに面する湾岸地域をも含めて扱われるのが一般的である。湾岸地域はいくつもの州にまたがる広域であり，言語・宗教分布も多様である。この意味では,「ペルシア湾」という地域の括りは一種独特な括りではあるが，イランにおいては十分に認知された「地方」区分として定着している。

当該湾の名称を巡ってはアラブ諸国との間に論争があることは周知の事実である。ところが，イランでは革命以前も革命以後も，全く自明の事柄のように「ペルシア湾」という名称が一般的に用いられ，しかもこの呼称に強い拘りを示している。イラン政府はかねてより，ペルシア湾に対しては強い主権意識を表明しており，湾口に位置するアブゥ・ムーサー島や大小トンブゥ島を巡る領有権問題に関しても，湾岸のアラブ諸国からの領有権主張を向こうにまわして一歩も譲る気配はない。

ペルシア湾という名称を標目に含む“地方史•誌”アイテムは全部で104点であるが（第４表参照），この内のほとんどが上記のような主旨に沿ったイラン政府肝いりの出版物であるか，あるいは各著者による同様の主張を内容とするものである。

換言すれば，この地域の歴史地理，古代遺跡，自然地理などを題材としているものを除くと,「ペルシア湾」と銘打っている“地方史•誌”出版の多くは，イラン政府あるいはイラン人によるペルシア湾に対する領土的主張という基本的動機に裏付けられているといっても良い。その意味では，権力奪取前後の，ホメイニー師の発言に代表されるような普遍的イスラーム国家の建設といった理念とは裏腹に，イラン政府は革命後も周辺地域に対しては国民国家イランとしての自己主張を依然として続けていると言えよう。ペルシア湾と題する“地方史・誌”の出版が，革命以前が46点，革命以後は49点（出版年不詳が９点）とほぼ拮抗しており，しかも革命後は毎年２～３

第５表　クルド人地域およびトルキャマン・サフラー関連
“地方史・誌”の年代別出版点数

イラン太陽暦	西暦	クルド人地域	トルキャマン・サフラー地域
出版年不詳		16	3
革命以前		47	11
革命後			
1358	1979／80	12	4
1359	1980／81	1	3
1360	1981／82	2	2
1361	1982／83	3	1
1362	1983／84	1	－
1363	1984／85	6	2
1364	1985／86	5	1
1365	1986／87	1	1
1366	1987／88	5	2
1367	1988／89	3	－
1368	1989／90	1	－
1369	1990／91	7	－
1370	1991／92	5	－
1371	1992／93	5	3
1372	1993／94	4	－
1373	1994／95	2	1
1374	1995／96	4	3
1375	1996／97	6	－
1376	1997／98	3	2
1377	1998／99	10	1
1378	1999／2000	14	－
1379	2000／01	15	2
小　計		115	28

（出所）　筆者調査により作成。

点ずつコンスタントに出版されているという事実は，革命以前はもとより，革命後もイランは国民国家であり続けていることをなによりも雄弁に物語っているといえるのではないだろうか。

以上，極めて限られた観点から，二，三の検討を試みてみた。その結果，“地方史•誌”の出版自体に関しては，イスラーム革命以前と以後との間の一定程度の相違を確認することが出来た。しかし，今回提示したデータをイランにおける「中央」•「地方」問題の分析材料として本格的に用いようとするならば，書誌情報に依拠した外在的分析にとどまらず，内容自体に踏み込んだ内在的分析が必須となる。分析方法の錬磨も含めて，具体的成果に関してはあと暫くの猶予を頂きたい。

（注１）　詳しくは拙著『イラン近代の原像－英雄サッタール•ハーンの革命－』東京大学出版会，1998年，「はじめに」。

（注２）　イラン・イスラーム共和国憲法第103条には，政府より任命される州知事，市長，郡長などの職責にある者は，当該の諸議会の権限内においては，これら議会の決定を遵守する義務を有する，とあり，これら地方行政体の首長が中央政府による任命にかかることが明記されている。

（注３）　筆者が今回収集し得た“地方史•誌”の総点

数2325点（対象地域項目は356項目）が，意図されている分析の材料として，量的にどの程度の有用性を有しているか計るひとつの目安として，同様の観点から収集されたコレクションの例を示しておくと，マリアム・ミール・アフマディーとゴラーム・レザー・ヴァルハラムの目録（Maryam Mīr Ahmadī & Gholām Rezā Varharam, *Ketābshenāsī -ye Mowzū'ī-ye Tārīkh-e Īrān,* Mehrdād, Tehrān, 1362）では総点数が314点，地域分類項目数が76項目，イラン・イスラーム共和国国民図書館の目録（Mehīn dokht Hāfez qor'ānī, *Ketābshenāsī-ye Tārīkh-e Irān,* Ketābkhāne-ye Mellī-ye Jomhūrī-ye Eslāmī-ye Irān, Tehrān, 1375）では，総点数761点，地域分類項目数169項目となっている。

（注４）“地方史・誌”収集・採録に際しての基準を示しておこう。

基本的にはイラン国内で出版されたもののみを対象とし，これには翻訳本も含めた。同時に刊本（石版を含む）のみを考慮に入れ，手稿本，学位論文などで刊行されていないものは除外した。また，単行本のみに限定し，雑誌論文の類も除外した。内容の面からは，特定の地域を専門に扱っているものでも，官公庁の出版物，例えば，報告書（gozāresh），統計（āmār），計画書（tarh/bar-nāme），業務報告書（kārnāme），実績報告書（'amalkard），会報（khabarnāme），年報（sālnāme）の類は基本的には除外した。

アイテム計算の基準としては，同一の標目であっても，版年によってすこしでも内容に違いがあれば別個のアイテムとして収録した。また，複数巻のものについては，内容に連続性があり，版年・版地などが同一の場合には同一のアイテムとして，また，それらが異なっている場合には別個のアイテムとして収録した。

（注５）本協会はイスラーム革命後，「文化遺産・偉人顕彰協会」と名前を変え新たな組織体制を取るに至ったが，その基本的使命は革命前と変わるところが無いと考えられる。詳しくは拙稿，「《文化遺産・偉人顕彰協会》の役割と実績－革命を越えた使命を帯びて－」（『イスラム世界』第59号，2002年８月）71～83ページを参照。

（注６）詳しくは拙稿，「国民国家イランにおける『地方史・誌』の出版と中央・地方関係」（後藤晃・鈴木均編『中東における中央権力と地域性』アジア経済研究所，1997年）305～350ページを参照のこと。

（注７）イスラーム革命を結果することとなる権力奪取は，前述のように，1979年２月11日であるが，便宜上，小稿では，権力奪取以前を革命以前，イラン太陽暦の1358年元旦（1979年３月21日）以降を革命以後として考えることとする。

（注８）東西アゼルバイジャン州，アルダビール州，ガズヴィーン州，ケルマーンシャーハーン州，ロレスターン州，テヘラン州，中央州，チャハール・マハール＆バフティヤーリー州，ヤズド州，コフギールーイエ＆ボイエル・アフマド州，ブーシェフル州，スィースターン＆バルーチェスターン州に支部が設置された。参照，Howze-ye Mo'āvenat-e Etelā'rasānī va Hamkārīhāye Beyn ol-Mellalī-ye Bonyād-e Īrānshenāsī, Āshenā'ī bā Bonyād-Īrānshenāsī, daftar-e avval, 1381 および Mo'āvenat- e Pazhūheshī-ye Bonyād-e ĪrŽnshenāsī, Āshenā'ī bā Sho'behā-ye Ostānī-ye Bonyād-e Ī rān shenāsī, daftar-e chahārom, 1379 .

（注９）クルド人地域とは，コルデスターン州に加えて，ケルマーンシャーハーン州や西アゼルバイジャン州の一部，ホラーサーン州の一部などをも含めて考えている。したがって，この数値にはケルマーンシャーハーン州関係，マハーバードやナガデなどの西アゼルバイジャン州に位置する諸都市関連のアイテムも含まれる。

（注10）トルキャマン・サフラーとは，トルキャマン人の生活・居住圏を意図しており，したがってゴルガーン平原部も含めたほぼ現在のゴレスターン州を想定している。なお，革命以前に出版された当該地域関連のアイテムでは，「ゴルガーン」或いは「エスタル・アーバード」という地域名称を用いるのが普通であり，「トルキャマン・サフラー」あるいは「トルキャマン人」という言葉を含む標目のアイテムが出版されるようになるのは，基本的には革命後と考えてよい。

（はちおし　まこと／東京外国語大学外国語学部教授）